名古屋芸術大学研究紀要第44巻　075～089頁（2023）

ラジオ放送された写真百年祭
― 大江素天と成澤玲川の記念講演をめぐって ―

Photographic Centenary Celebration Broadcasted on the Radio
― Commemorative Lectures by Soten Oe and Reisen Narusawa ―

松實　輝彦　*MATSUMI Teruhiko*
（美術領域）

はじめに

多彩な発明家であったフランス人のジョゼフ・ニセフォール・ニエプス（Joseph Nicephore Niepce、1765-1833）は写真の発明の先駆者でもあった（図１）。彼は兄のクロードとともに1820年代にアスファルトの感光性を利用して、対象物の画像をガラスや金属の板に転写しようと試みていた。ニエプスはアスファルトの一種である瀝青を塗布した、白目と呼ばれる銅と亜鉛との合金の板をカメラ・オブスキュラに入れ、８時間程の露光を施すことによって画像の定着に成功する。ニエプスは世界で最初の写真技法となった自身の技術を、「太陽で描く」という意味の「エリオグラフィー」と呼んだ。その技法によって1825年に撮影された写真画像は、原板が現存する世界最古のものとされている。エリオグラフィーの誕生から100年が経過した1925年、イギリスのロンドンやフランスのパリでは写真の始祖として発明家ニエプスを顕彰する記念行事が催された。

東京朝日新聞社のグラフ部長であり『アサヒグラフ』編集長も兼任していた成澤玲川（1877-1962）は、ニエプスをめぐるこのようなヨーロッパでの動向を素早く察知する。成澤はこの機を逃さず日本においても同様の写真イベントを立ち上げようと、大阪朝日新聞社の整理部長であった大江素天（1876-1950）に声を掛けて「写真百年祭」を企画した。バイタリティー溢れるふたりの熱意と努力によってその企画は迅速果敢に稼働し、日本におけるニエプスを顕彰する大規模な写真行事はその年の晩秋に、大阪と東京という２大都市での開催が実施されることとなった。

図１　ニエプスの肖像画
（『アサヒグラフ臨時増刊　写真百年祭記念号』より）

具体的な期間としては1925年10月31日から11月６日まで、大阪朝日新聞社が主催する「大阪の部」が大江素天を中心に組織され、引き続き11月８日から14日まで、『アサヒグラフ』（東京朝日新聞社）が主催する「東京の部」が成澤玲川を中心に組織され開催されるという、一大写真イ

ベントとして見事に結実したのである。

大阪・東京それぞれの開催期間内には、記念式典、記念講演会、写真競技大会、写真作品展覧会、写真史料展覧会などの多彩な行事が取り組まれた。そのなかのトピックとして、わが国で放送が開始されたばかりのラジオに大江と成澤がそれぞれの開催地にて出演し、放送を行ったことが挙げられる。電波によって人々に声を届けるというラジオ放送自体がまだ目新しい事柄であり、日本での写真家以外の写真関係者による放送はこのふたりが最初であった[1)]。

残念ながら当時の音声記録は存在しないが、本稿ではふたりのラジオ放送がどのようなものであったのか、そしてそのことが当時およびその後の写真界にいかなる影響を与えたのかについて、残された図像資料や雑誌等の文献資料を手掛かりとしながら以下に考察を行っていく。

なお、ニエプスに因んだ日本でのこの写真イベントの名称については、各種メディアによって「ニエプス写真百年祭」や「写真発明百年祭」といった異なる表記も同時期に多くみられるのであるが、本稿では引用文献での原文表記以外では、このイベントの主催者である朝日新聞社が使用した「写真百年祭」に統一して表記する。

1．ふたりの組織者――大江素天と成澤玲川

大江素天と成澤玲川はともに朝日新聞社に在籍した編集者でありジャーナリストである。いわゆる写真家ではないが、わが国の写真の歴史においてそれぞれ重要な仕事を成した人物である。しかしながら、その主だった活動期間が大正末期から昭和戦前期というモダニズムの時期ということもあり、両者ともに現在ではほとんど忘れられた存在になってしまったといえよう。

東京都写真美術館の監修により2005年に刊行された、わが国の写真に関わる人名事典である『日本の写真家――近代写真史を彩った人と伝記・作品集目録』（日外アソシエーツ）には、両者ともに項目が立てられ、その経歴等が掲載されている。以下ではその事典の記述を引用しながら、それぞれの人物紹介を行うことにしたい。

まず大江素天について。大江は1876年２月、兵庫県多紀郡大芋村（現・篠山市）に生まれる。本名は大江理三郎。小学校卒業後、14歳で書いた時代小説が「神戸又新日報」に掲載される。大江の青年期以降については『日本の写真家』より、一部省略しながら引用する。なお、記載される年月日はすべて和暦である。

［明治］29年京都鉄道会社に入社、会計を担当するが筆を捨てず、37年大阪朝日新聞の懸賞小説に「琵琶歌」が次点入賞、（…）39年鉄道国有法により官吏となり、のちに神戸出納事務所に務めたが、再び懸賞小説の佳作に入ったことがきっかけで41年２月大阪朝日新聞社に入社。（…）45年明治天皇崩御に際して御大喪の報道に携わり、大正５

年青島攻略戦では従軍記者として第二陣の記者団に加わって写真を撮影、6年には八幡製鉄の大疑獄事件を連載記事で取り上げて捜査を促すなど、記者としての活躍にはめざましいものがあった。（…）14年大阪朝日新聞整理部長（二人制の一人）となり、編集に携わる。15年3月には写真団体219団体を集めた全関西写真連盟の結成を斡旋し、全関西写真競技会を開催した。2（ママ）年写真雑誌「アサヒグラフ」と大阪朝日新聞の共催によるニエプス写真百年祭の企画にあたり、東京朝日新聞の成沢玲川と呼応して功績が多かった。のち大阪朝日新聞顧問。[2)]

つづいて成澤玲川についてみていきたい。成澤は1877年12月、長野県上田市に生まれる。本名は成澤金兵衛（幼名は金弥）。弟の立木真六郎は写真家であり、甥に版画家の品川工がいる。では先の大江と同様に成澤についても『日本の写真家』より一部省略しながら引用する。この記述箇所についても記載された年月日は和暦である。

青年時代に内村鑑三に心酔し、その門下生となる。明治39年に渡米し、邦字新聞「中央日報」を経営。この間に写真術を習得、同紙の写真部長を兼務する傍ら、在米同胞の活動状態を数多く撮影した。大正2年帰国。（…）7年東京朝日新聞社に入社。12年週刊グラフ誌として復活した「アサヒグラフ」の編集長となり、同誌が日本を代表するグラフ雑誌となる基礎を築いた。15年には「アサヒカメラ」の初代編集長に就任。（…）また岡田桑三、村山知義とともにドイツ工作連盟主催「映画と写真国際展」の日本招聘に尽力し、昭和6年にはその写真部門だけを「独逸国際移動写真展」として東京・大阪で開催。当時欧米の最先端だった近代写真の粋を集めたこの展覧会は、安井仲治や木村伊兵衛ら次代の新進作家たちに多大なる影響を与えた。9年日本放送協会報道部長。戦時中は大日本写真報国会理事長なども務めたが、戦後は「日本写真年報」の編集などに従事した。27年日本写真協会賞を受賞。[3)]

以上が後年に編纂された二次資料からの抜粋による両者の経歴である。客観性が求められる事典という出版物からの記述ゆえに、当然のことながらやや味気ないものに感じてしまう点は否めない。そこでもう少し生き生きとした記述に触れてみたいとの観点から、まことに管見ではあるが両者の著作を瞥見して、彼らが自身について述べている箇所を上記に付加するという按配で以下に紹介してみたい。

まず大江素天については1939年に刊行された随筆集である『写真太平記』（朝日新聞社）を手に取ってみると、巻頭の「はしがき」に次のような記述がみられる。

思へば私の写真に因縁づけた物語も古いもので、組立三脚をふり回し“健康のため”“趣味のため”と対手相応に気の弱い弁疏をしながら二十いくつかの若盛りから六十の

坂を越した今日まで気焔ばかり揚げて来た。畏友成澤玲川君と写真連盟の行司役を承つてから更に熱度が増し、始祖ニエプス百年祭が東西両朝日によつて行はれた時には長崎から仙台まで走りあるいて文献史料をあさり、現在写真界の寵児となつて毎月めざましい元気を見せながら世の中へ躍り出してゐるアサヒカメラ創刊の議にも与り、それからといふもの、一層の執着を写真に持ちまたかといはれるほど吠えつづけ、そこへ若い知友の思ひやりも加はつて“あいつ今遊んでゐる”と月に一度はアサヒカメラの何頁かを開放してくれる。（文中の傍点は原文）[4]

次に成澤玲川については1940年に刊行の『音と影　ラヂオとカメラの随筆集』（三省堂）を手に取ってみると、これもその巻頭の「はしがき」において次のように述べられている。

報道本能からアメリカでカメラを買つたのが明治四十年である。先づ母国へのたよりの中に写真が加へられ、次いで邦字新聞中央日報の新聞写真や、フオト・エラ、アメリカン・フオトグラフィー誌等の芸術写真となり、更に一万二千尺の在米同胞発展映画にまで発展した。大正七年九月東京朝日新聞社に入つたが、上記の経験が役立つてアサヒグラフ、アサヒカメラ、映画朝日等の創刊に当たり、また永くその編集を担任した。それ等の誌上の提唱が実際運動となつて写真百年祭の主催や、全関東写真連盟、全日本写真連盟の結成、国際写真サロンの創設、写真年鑑の創刊等となつたのである。[5]

このように大江と成澤はともに若い頃より積極的に自ら器材を求めて写真撮影に取り組み、持ち前の文章力や企画力、さらに行動力にも大層秀でた編集者であった。そのふたりが同時期にあって奇しくも東・西の朝日新聞社の要職に在籍していたという縁とも重なることで、新しい社会メディアとしての写真の重要性をひろく世の中に知らしめる活動へと至ったのである。

換言すれば、このふたりだったからこそ、1925年の朝日新聞社の一大イベントとして急遽企画した「写真百年祭」を成功裡に導くことができた、ともいえよう。ジャーナリストであった彼らはまた、当時の日本の写真界における実に類まれな組織者でもあったといえるのである。

２．写真百年祭「大阪の部」における大江素天のラジオ放送

1925年に開催された写真百年祭はイベント終了後に、主催者であった朝日新聞社から２点の記録集が刊行されている。まず同年12月20日に『アサヒグラフ臨時増刊　写真百年祭記念号』が発行され、つづいて1926年１月１日に『写真百年祭記念講演集』が発行された（図２）。なお後者については、表紙と扉頁、背表紙が「写真発明百年祭　記念講演集」と印刷されているが、書籍本体の目次、本文内の頁表記、奥付等はすべて「写真百

年祭記念講演集」と表記されているので、そちらの書名を本稿では使用することとする。また、本稿では以下において『アサヒグラフ臨時増刊　写真百年祭記念号』を『記念号』、『写真百年祭記念講演集』を『講演集』と略記する。

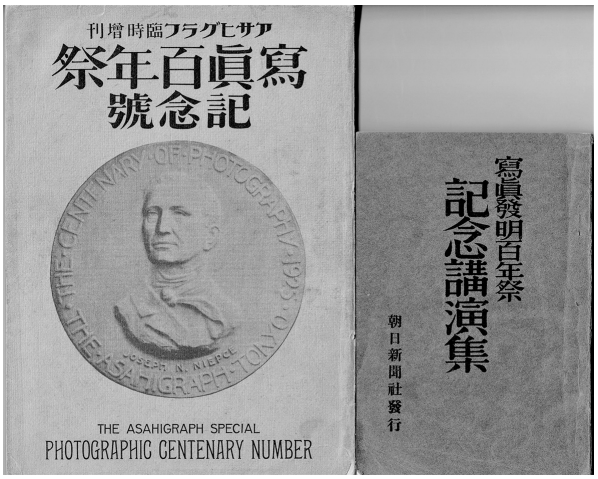

図２　『アサヒグラフ臨時増刊　写真百年祭記念号』表紙（左）
『写真百年祭記念講演集』表紙（右）

『記念号』はその大半を占める160頁が「写真の部」として、日本写真史の黎明期のイメージをグラビア印刷による多数の図版で紹介するものである。そして同書巻末の22頁が「記事の部」とされ、時系列とは逆に東京から大阪の順にそれぞれ実施されたイベントの記録が掲載されている。発行および編集兼印刷人は「成澤金兵衛」とあり、成澤の本名で記載されている。定価は１円50銭である。もう一方の『講演集』は小川一眞、福原信三といった著名な写真家や森芳太郎、鎌田彌壽治といった写真研究者等、多彩な写真関係者12名による講演の速記録が221頁にわたって収められている。こちらの発行・編集・印刷人も成澤金兵衛であり、定価は60銭である。

それでは『記念号』の「記事の部」から、写真百年祭「大阪の部」がどのようなイベントであったのかを簡潔にみていきたい。

第一日目（10月31日）は大阪・中之島公園において「写真競技大会」が開催された。参加者は約2000人。撮影課題は同公園内での人物撮影であった。後日行われた審査の結果、個人競技の部では神戸市の黒津喜市が特賞を獲得し、団体競技の部では神戸赤窓会が優勝となった。

第二日目（11月１日）は大阪中央公会堂にて「記念祭典」が行われた。会場祭壇に設置されたニエプス肖像の除幕式があり、各種の表彰式が行われた。その後、記念講演会が開催された。３名の演者とその演題は以下の通りである。大阪高等工芸学校教授・桑田義備「物理学から見た写真の発明」、京都帝国大学教授・宮田道雄「写真発達の歴史」、写真師・小川一眞「本邦写真界の懐古」。午後５時に講演会は終了する。その後、午後６時から北浜・灘萬ホテルで「写真大懇親会」が開かれた。この会の最中に大江素天のラジオ放送が行われた。詳細については後述する。

第三日目（11月２日）は「アサヒグラフデー」として、大阪市内の写真関係者が主体となって『アサヒグラフ』の宣伝が行われた。関係店舗の店頭でニエプスの肖像が飾られ、高島屋百貨店では東亜キネマの映画俳優たちが参加しての模擬撮影が行われた。

図３　ラジオ放送をする大江素天
（『アサヒグラフ臨時増刊　写真百年祭記念号』より）

第四日目以後（11月３日より７日まで）は大阪朝日新聞社にて「写真史料展覧会」が開催された。展示された史料の点数は2000点以上で、このような写真をテーマとする展覧会は初の試みだったこともあり、連日5000人を超える来場者で賑わったとのことである[6)]。

朝日新聞社が当時「写真週間」と大々的に広報した写真百年祭「大阪の部」の概要を振り返った。大江のラジオ放送は第二日目に行われたとあった。しかしながら、残念なことに関連資料類のなかに彼の放送原稿や講演の速記録といった文献資料を見つけることはできなかった。マイクを前にラジオ放送に臨んでいる大江の小さな写真図版が１点、『記念号』に掲載されているのが確認された程度である（図３）。

また『記念号』の「記事の部」には大江による長文の記事「憧れの心を満した歓び」が掲載されているが、これは大阪での当該イベントを振り返るという位置付けで後日に書かれたものであった。それでは以下に『記念号』に掲載された「大阪の部」の記録から、僅かな分量ではあるが大江のラジオ放送に触れている「懇親会と放送」の小見出しが付された項目の全文を引いてみる。

> つづいて午後六時から北浜灘萬ホテルで写真大懇親会を開いた、来会者約百名、学者、材料商、写真師、素人芸術写真家など写真に関係ある階級の人々を網羅した、卓上和気にあふれた写真談がはずみ、将来の発展に関し各種の打合せも行はれた折柄本社大江整理部長の「写真が日本へ来てから」と題する記念講演のラヂオ放送があり、わが国へ写真が来た当初のエピソード（ママ）や文化に貢献の跡をたづね約三十分、熱心にこれを聴き更に歓談を交へて九時すぎに散会した（原文句点なし）[7)]

当時、大江と交流が深かった大阪の写真家のなかに、浪華写真倶楽部の重鎮だった米谷紅浪がいる。米谷は自身の写真撮影活動と並行しながら、大正から昭和初期における写真界の状況を、写真雑誌での長期連載というかたちで筆記しつづけた稀代の記録者でもあった。その米谷による連載記事「写壇今昔物語」のなかに――実際の出来事と発表時の記述との間には10年以上のタイムラグはあるのだが――「ニエプス写真百年祭」という見出しで、当時の様子が再現記述されている。「大阪の部」第二日目の後半箇所を以下に引いてみる。

> 次いで京阪神三写真師会、大阪写真材料商、浪倶［浪華写真倶楽部］の各代表祝辞が

あり、終つて大講演会に移り、桑田高工教授、宮田京大教授、小川一眞三氏の各講があり、同夜は北浜灘萬ホテルで六時から全国写真家大懇親会催され約百名の要人出席で宴酣の頃主役の大江素天氏の姿がかき消えたかと思つたトタンに、朗々たるラヂオ放送が素天先生の肉声を伝へて来ました。何しろまだラヂオの初期の事で皆実に玄妙不可思議の感に打たれたのでありましたが、それもその筈会場灘萬から仮放送局の三越まではホンの一走り行程であつた訳です。放送演題「写真が日本へ来てから」――。[8)]

やはりここでも大江のラジオ講演の具体的な内容を伝える記述はみられなかった。しかしながら、『記念号』の記録文にはなかったより詳細な事柄――ホテル会場のスピーカーから大江の朗々たる声が聴こえていたこと、大阪の仮放送局が三越百貨店内に設営されていたこと等――が米谷による精彩に富んだ筆致で記録されている。短い記述箇所ではあるが、その当時の様子を生き生きと伝える貴重な文献資料といえよう。

3．写真百年祭「東京の部」における成澤玲川のラジオ放送

以下では「大阪の部」に引き続いて、1925年11月８日から14日まで開催された「東京の部」についても同様に、『記念号』の記録資料を基に簡潔にみていきたい。

第一日目（11月８日）の午前は目黒西郷侯爵邸内を主会場とする「写真競技大会」が開かれた。参加者は約3000人。撮影課題は４題（侯爵邸内、百年祭式場、丸の内雑観、銀座スケッチ）であった。後日行われた審査の結果、最上位の一等に浅草在住の高橋又右衛門と千駄ヶ谷在住の石田喜一郎の２名が選出された。午後からは日比谷公園音楽堂を会場に、「百年祭式典」が行われた。記録写真にみられるように会場は１万人を超える参加者で「立錐の余地なき盛況」であった（図４）。また、この日より12日まで、日比谷図書館別館にて「写真史料展覧会」が開催され、同日より14日まで京橋・高島屋にて「学術写真・懸賞写真展覧会」も開催された。そして同日の午後７時25分、成澤玲川による記念講演「写真発明の話」が東京放送局からラジオ放送された。この放送についても後述する。

第二日目（11月９日）は麹町内幸町政友会本部にて「全国写真師大会」が行われた。全国各地より代表者約300名が参集した。様々な議題の報告会や交流のプログラムが組まれ、午後５時に閉会後は直ちに懇親会が盛大に開かれた。

図４　東京・日比谷音楽堂での写真百年祭式典
（『アサヒグラフ臨時増刊　写真百年祭記念号』より）

第三日目（11月10日）は午後6時より丸の内商工奨励館にて「記念大講演会」（第一夜）が開催された。演者とその演題は以下の通りである。薬学および理学博士・長井長義「日本最初の写真師」、写真師・中島待乳「題不詳（記録では「興味ある昔話」との由）」、東京美術学校教授・森芳太郎「写真の発明とその生長」、写真家・福原信三「芸術写真に就て」、小西写真専門学校教授・江頭春樹「天然色写真の話」、日本写真師協会理事長・江崎清「肖像写真に於て営業写真家に望む」。午後11時に閉会。また、この日より17日まで、日本橋・三越にて「芸術写真・肖像写真展覧会」が開催され、同日より12日まで日本橋・東美倶楽部にて「浪華写真倶楽部展覧会」も開催された。

第四日目（11月11日）は午後6時より丸の内商工奨励館にて「記念大講演会」（第二夜）が開催された。演者とその演題は以下の通りである。写真師・小川一眞「日本最初の写真界」、小西写真専門学校教授・秋山轍輔「日本における写真の沿革」、東京高等工芸学校教授・鎌田彌壽治「日常生活と写真」、理学博士・市岡太次郎「写真工業の話」、写真師・小西種忠「写真の本質とその使命」。講演会は両夜ともに数百名の聴衆が参加して大盛況であった。

第五日目（11月12日）は午後6時より帝国ホテルにおいて「全国写真家大懇親会」が開催され、全国各地より300名の出席者があり、盛会裡に午後10時散会となった。

第六日目（11月13日）は「記念展特別日」として三越での「芸術・肖像写真展」および高島屋での「学術・懸賞写真展」において、各関係団体より選出の係員が会場に出張して解説を行った。

第七日目（11月14日）の最終日は午後6時から丸の内商工奨励館において「活動写真沿革映画会」が開催された。影絵や幻燈の映写に始まり、「旅順開城」や「明治大帝と乃木将軍」といった歴史映画から松竹キネマの最新作「御詠歌地獄」まで計12本の映画が上映され、午後10時に閉会した[9)]。

以上、写真百年祭「東京の部」の概要を振り返ってみた。この一連のイベントを取り仕切った東京朝日新聞社グラフ部長の成澤玲川は、イベント初日の11月8日午後7時25分から30分間にわたって、愛宕山の東京放送局に赴いてラジオ放送を行っている。その写真百年祭記念講演における演題は「写真発明の話」であった。さきの大江と同様に、成澤も放送時の様子が撮影されて記録に残されている（図5）。そして幸いなことに成澤のラジオ放送については、講演速記録の全文が『記念号』に採録されている。速記録ゆえに固有名詞や句読点の表記が曖昧であったり文脈上のつながりが判りづらいといった箇所が散見されるが、それらを差し引いても貴重な記録資料といえるものである。以下、簡潔に要所を引用し

図5　ラジオ放送をする成澤玲川
（『アサヒグラフ臨時増刊　写真百年祭記念号』より）

つつ成澤がラジオで語った事柄をみていきたい。

成澤はその放送の冒頭を、「私は今東京放送局のマイクロフオーンの前に立つて多くの方々に写真発明のお話をするのでありますが、残念なことには皆様のお顔を見ることが出来ず、また皆様も私の顔を御覧になることが出来ない。声はすれども姿は見えず、といふのは本当にこのことでありませう」と述べておいてから、一息に時代を17世紀末期へと遡り、フェネロンによって書かれた「未来記」のエピソードについて紹介する[10)]。さらに「十八世紀の中頃テイフエーニヌ・ド・ラ・ロツシユといふ人のギフアンチーと題した夢物語のうちに作者がアフリカの中部を旅行した話がある」として、そのエピソードも紹介していく[11)]。ティフェーニュ・ド・ラ・ロシュが1760年に執筆した寓意小説『ジファンティー』には、作者が暗い大広間に案内されると荒れ狂う海や精霊たちが壁一面にリアルに再現されていたという描写があり、そのくだりは写真史を語る際にはこれまでしばしば引用されてきた「写真的な」一節である。作者であるティフェーニュは、その大広間の様子をカメラ・オブスキュラの光景になぞらえているのである。成澤は写真以前の映像の歴史を汲みながら「十九世紀の始めになりますと、カメラ・オブスキユーラにうつる影を捉へやうと苦心する人々が方々に現はれました」と切り出す。つづけて成澤は「始めはレンズがなかつたのが、後にレンズを取付け、そのレンズに絞りをつけたりまたはカメラに蛇腹をつけたりして今日のやうになつたのでありますが、十九世紀の始めになりましてこのカメラにうつる美しい絵をどうしたら紙なり布なりにそのまま取つて、その影を永く留めて置くことが出来ようかと苦心した」と述べて、次第に聴取者をそのラジオ放送の主題へと誘っていく[12)]。

そうして成澤は放送の後半においてニエプスとともに、もう一人の重要な写真の発明家であるルイ・ジャック・マンデ・ダゲールを登場させる。このふたりをめぐるエピソードが成澤のラジオ放送のなかで最も肝要な箇所だと判断されるので、やや長く読みづらいものではあるが速記録の原文のまま以下に引いてみる。

> その後ニセホール・ニエプスといふ仏蘭西人が一八一四年から矢張このカメラの影をつかまへようとして苦心してゐましたが、遂に一八二五年即ち今から百年前にアスフアルトの上にカメラの影を捉へることに最初に成功しました、その時分同じフランスにダゲールといふ絵師がをりまして、デオラマを描いたり芝居の背景を書いたりしてゐましたがこの人もどうかしてカメラの影を捉へて天然を筆の先でうつす手数を省き、そのありのままの姿を残さうと苦心しました、当時パリにシユバリエといふレンズ屋があつてニエプスはその店の常得意でありましたが、ダゲールもまた同じ店で買物をしてゐた。或る時シユバリエがダゲールにニエプスといふ人がシヤロンといふ田舎にゐてあなたと同じやうな研究をしてゐるといふ話をしたので、ダゲールは直にニエプスに手紙を出してどうか、あなたと共同して研究したいと申込みました。ニエプスはその手紙を見てこ

れはおれの研究を盗まうとする山師だらうと思つたので、ストーブの中へ手紙を投げ込んで返事をやらなかつた一年たつてダゲールはまたニエプスに手紙を出して自分の研究の苦心を語つたのが大にニエプスを動かしてここに共同研究が成立ちました。それから間もなくニエプスは亡くなりましたが、ダゲールはニエプスの息子と共同して研究をつづけ千八百三十八年に銀の板の上に写真を焼付けることを発明しました。ニエプスの発明したのはヘリオグラフイーといひましたが、露出に六時間から八時間かかるので人物などは勿論うつすことが出来ない。然るにダゲールの発明したダゲレオタイプといふのはニエプスの方法に比べると時間は十五倍位早く写せるし、また実用に適する所から忽ち流行を来し、発明から僅か三年目の天保十二年には和蘭の船で我邦に輸入され長崎の上野俊之丞氏が之を鹿児島の島津公のお邸へ持参して日本で最初の撮影をしたのであります。[13)]

ラジオ放送の最後にあたって成澤は、シュバリエが営むレンズ店での奇妙なエピソードを紹介する。ニエプスとダゲールが去った後に謎の青年がそのレンズ店を訪れ、胸ポケットから現像された写真プリントをシュバリエに預けると、それきり青年は姿を消してしまうのである。「若しこの青年が生きてゐたならば写真の発明者はその人であつたかも知れませんがそれにしてもこの発明は矢張一八二五年で今から百年前になるのであります。私の写真のお話はこれで終ります。御耳を拝借して有難うございました」と述べて放送は終了となった[14)]。

この放送で述べられたエピソードの数々には、実のところ元ネタがある。1925年にフランスのジョルジュ・ポトニエが著した『写真の発見の歴史』が当時広く知られた写真史のテキストであり、成澤もそこから多くを負っていることは明らかである[15)]。おそらく成澤は和書史料のみならず当時刊行されたばかりのフランスの研究書にも目を通したうえで、この写真イベントにおけるラジオの記念講演に臨んだものと思われる。

４．大江素天と成澤玲川のラジオ放送の意義

成澤のラジオ放送にあったように日本への写真の伝来は早く、薩摩藩御用の長崎商人である上野俊之丞が1848年にオランダからダゲレオタイプ器材一式を輸入し、薩摩藩主の島津斉彬に納品している。藩主の島津は歴史学者の市来四郎や薩摩藩士の宇宿彦右衛門に研究を命じるが、現像のための薬剤の調整は容易ではなく撮影に至るまで大いに難航する。市来と宇宿が藩主を被写体にダゲレオタイプでの撮影にようやく成功したのは1857年であった。その後、日本の各々の港街から徐々に写真術が伝播していくのであるが、器材の高価さと薬剤の調合や撮影の難しさからダゲレオタイプの普及は進まなかった。新たな器材の開発や技術の改革を繰り返しながら、一般の市民階級がアマチュア写真家となって日常的にカメラでの撮影に興じられるようになるのは1910年代以降であった。

一方、日本でのラジオ放送については、1925年３月に東京放送局が芝浦の仮放送局から開始したのが最初である。そのときの受信者数は920であった。同年の７月に東京放送局が愛宕山より本放送を開始する。語学講座がテキストの発行にともなって開始され、文芸作品のラジオドラマも放送されることで、受信者数も続々と増加していった。そんな折に写真編集者でありジャーナリストの大江と成澤が、同年の11月にそれぞれ写真の歴史についての放送を行ったということは、それが放送の歴史においても大層早い取り組みだったものと理解されよう。日本のモダニズム期に誕生したラジオは、その放送活動の初期段階から写真および写真界との関わりの深いメディアであったことが、この事例からあらためて窺えるものである。

米谷紅浪は浪華写真倶楽部の代表として大阪・東京のいずれの写真百年祭にも参加しており、両者の記念講演のラジオ放送を聴いていた。大江の放送については先に述べたが、成澤についても米谷は記録を残している。写真百年祭「東京の部」第一日目の午後からの米谷の記述を以下に引いてみる。

> 次いで午後一時から写真百年祭式典が日比谷音楽堂で挙行、先づ司会者星野辰男氏によつてニエプス氏肖像除幕式があり、次いで成澤玲川氏式辞、（…）其他多数の祝辞等あり緒方東朝編集局長の挨拶あつて、我国写真界の功労者として、上野俊之丞、上野彦馬、下岡蓮杖、柳川春三、四故人の表彰が行はれて閉式となりました。同夜は東京放送局から成澤玲川氏の「写真発明の話」が名放送されて感動を与へましたが特に此百年祭に参加されざる地方の方々のために非常に意義があつた事と思はれます。[16]

実際にイベントに参加した当事者であった米谷による実感のこもったコメントである。

さらに大江と成澤のラジオ放送の影響は当日限りのことではなく、放送後にも様々なところにその余波は顕れている。まず大江に関して述べると、ちょうど写真百年祭が終了したタイミングでの1925年11月25日に、全関西写真連盟創立のための創立委員会が開かれている。「全関」の略称で知られ、その後は全日本写真連盟関西本部という名称に変更されるが、関西写壇の中心に位置する組織がその歩みを記した後年の記録集に次のような文章がみられる。

> 「中之島撮影競技会」以来、数年にわたって競技会を重ねるごとに、アマチュアの写真熱は異状なまでに急上昇し、ニエプス百年祭の各行事によってさらに拍車をかけ、米谷・藤井両氏による「写真連盟組織」の提唱となった。その実現の具体化をはかるための創立委員会が、11月25日、大阪朝日新聞社楼上で開かれた。[17]

この委員会には米谷紅浪、藤井藤治郎、結城真之輔、桑田一郎といった関西写真界の重

鎮が集い、連盟の規約等についての意見交換を行って創立への機運が一気に盛り上がるのであるが、入念にその会議を準備・手配したのが大江であった。また、翌年の４月から５月にかけて大阪放送局にて写真講座が放送されたことが、先の記録集に掲載されている。

［1926年］４月３日から５月２日までの間に５回にわたり、「全関」委員の「写真趣味に関する講演」が、大阪放送局の委嘱によって放送された。

４月３日	写真趣味について	米谷　紅浪
同　４日	人物写真の撮し方	堀　　真澄
同 18日	風景写真について	福森　白洋
同 25日	写真と色	平井　政吉
５月２日	写真の応用	結城真之輔[18]

この放送を担当した講師陣のなかに大江の名前はないが、大阪放送局との間に入って写真講座のコーディネイトをしたであろうことは十分に推察される。少なくとも写真百年祭「大阪の部」での大江のラジオ放送があって、その後に関西での写真講座シリーズが企画・実施されたという放送史の時系列は揺るぎようのないものである。

次に成澤についても述べておこう。成澤の場合はさらに直接的に日本の写真界と放送界を架橋するという、より重要な役割を果たすことになる。彼がジャーナリストとしての自身の歩みに触れた文章を先にみたが、そのつづきの箇所にはラジオ放送との関わりについても以下のように簡潔に述べられているのである。

昭和九年九月朝日新聞社を退いて日本放送協会に転じ、報道部長在任中、昭和十年六月報道部内に国際課が新設され海外放送を開始して今日の大国際部の基礎が据ゑられたことは懐かしい思出の一つである。また報道放送の改善、アナウンスメントの研究、アナウンサーの養成、ニュース用語の検討等にも微力を注いだが、その間に放送全般に関する知識と経験とを得たことを非常な仕合せと思つてゐる。（…）私は本年［1940年］五月足かけ七年御厄介になつた日本放送協会を退いたが、放送に関する興味は相変らず持ちつゞけてゐる。[19]

成澤は東京朝日新聞社を退職した後、1934年から1940年まで日本放送協会の要職についていたのである。その間も写真界とのパイプは堅持されており、成澤は東京放送局で計２回にわたってラジオの写真講座のシリーズを手がけることになる。

最初のシリーズは「アマチュア写真講座」と銘打たれ、1936年３月24日から４月18日まで放送された。毎週の火曜・木曜・土曜、午後６時25分から６時55分までの30分間、全12回の放送だった。担当する講師の人選も成澤が行った。以下に担当者と講座の題目

を記しておく。鎌田彌壽治「写真術総論」、高桑勝雄「カメラ及写真材料の発達」、塚本閣治「山岳写真と海景写真（撮影その一）」、森芳太郎「風景・人物・建物（撮影その二）」、田村榮「子供・動物・静物の撮影に就て（撮影その三）」、下島勝信「構図とトリミング（撮影その四）」、三浦寅吉「スポーツ写真と報道写真（撮影その五）」、勝田康雄「暗室・現像・焼付」、吉川速男「写真引伸の知識」、金丸重嶺「小型カメラ（附夜間撮影）」、中山岩太「芸術写真と新興写真」、松野志氣雄「広告写真の基礎的問題」。

この講座は聴取者からの人気を得て大いに評判となった。そのことを受けて、東京放送局は翌年も同様の講座を開催することとなる。２回目のシリーズはタイトルもシンプルに「写真講座」となり、成澤による講師の人選も金丸重嶺と吉川速男を除き前回のメンバーから多数が入れ替わることになった。その放送期間は1937年８月18日から９月13日まで。毎週の月曜・水曜・金曜、午後７時30分から８時までの30分間、全12回の放送だった。この講座の担当者と講座題目も同様に以下に列記する。星野辰男「取材と狙ひ方」、金丸重嶺「写真の構成要素」、安河内治一郎「人物写真の要領」、井深徵「風景写真の撮り方」、西山清「静物写真の撮り方」、木村伊兵衛「スナップ写真に就いて」、吉川速男「露出の話」、長濱慶三「感光材料の話」、掛札功「写真と薬品」、堀江宏「現像と定着」、齋藤鵠兒「構図と修整」、鈴木八郎「密着・引伸・上達の秘訣」。

いずれの写真講座についても担当講師の人選は特定の倶楽部団体や会派に偏らず、写真家以外にも評論家やジャーナリストを起用することで、それが講座内容の幅や厚みを打ち出すことにもなっていった。まさに写真界を知り抜いている成澤の組織者としての面目躍如といった仕事ぶりである。

このようにそれぞれ大阪と東京の朝日新聞社の要職にあって、1925年に「写真百年祭」という大きなイベントを成功させた大江素天と成澤玲川は、ともにジャーナリストという職域から写真というメディアのさらなる重要性を十分に認識しており、そのことを当時の最先端のメディアであるラジオ放送に自ら出演することで、より広く世間に知らしめたのである。その優れた企画力と俊敏な行動力は、大いに賞賛に値するものであり、ふたりのこれら一連の取り組みは、わが国の写真史と放送史の双方においても十分に意義深いものであったといえよう。

おわりに

よく知られている諺のひとつに「餅は餅屋」がある。世の中の物事にはそれぞれの専門家がいる、という意味合いである。その謂いからすれば、写真のことは専門の写真家に任せておけばよいということであろう。営業写真家に加えてアマチュアの写真家たちが大量に出現し、各々が自前のカメラを手にして日常的に撮影する機会が普及しはじめたモダニズム期のわが国にあって、一見したところ写真の専門家の存在感は薄まっていくばかりであった。しかしながら一方では、もっと詳しく専門家の意見を聞いてみたいというニーズ

も存在していた。ただ、写真家たちは広く大衆に向けて、自らの声で写真に関することを伝えるという手段を持ち得ていなかった。

ラジオ放送の開始は、写真家にとっても自分の声で多くの人々に写真について直接に語り伝えることが可能となった画期的な事柄であった。その大きな可能性を拓いた写真ジャーナリストであり類まれな組織者が大江素天と成澤玲川であった。ふたりは日本における写真の伝来とその意義を自らラジオで語り、写真連盟という名称のもと全国の写真家たちを組織し、ラジオの放送講座を企画して写真家たち自身に写真の魅力を語らせることで、写真というメディアのより一層の社会普及に貢献したのである。

これまでの一般的な歴史分野の記述スタイルは、概ね当該分野で華々しく活躍した人物たちにスポットライトを当てた「ヒーロー列伝」といったものが多かった。そのことは写真史についてもしかりである。もちろん著名であろうとなかろうと写真家の登場しない写真史というものはあり得ないものだが、歴史的記述として描出される写真家たちの背後やその周囲には、彼らを支援した人々もまた確かに存在していたのである。

ささやかな試みではあったが本稿ではモダニズム期の日本における、いわゆる写真家とはみなされない写真関係者と呼ばれる人々に照明を当て、彼らが写真の歴史に果たした役割やその意義について考察を行うことで新たな知見を得た。今後もこのような視点に立ち戻りながら、近代日本の知られざる写真史の解明に取り組んでいきたい。

註

1）日本で最初にラジオ放送を行った写真家は写真芸術社の主宰者であり、資生堂の初代社長でもあった福原信三である。福原は1925年８月３日、東京放送局において「写真の趣味」という演題で20分間にわたって放送を行っている。福原信三のラジオ放送については以下の拙稿を参照のこと。松實輝彦「電波に乗った「光と其諧調」――福原信三による一九二五年のラジオ放送」、『大正イマジュリィ』第14号、大正イマジュリィ学会、2019年、75-95頁。

2）東京都写真美術館監修『日本の写真家――近代写真史を彩った人と伝記・作品集目録』日外アソシエーツ、2005年、80-81頁。

3）同上、312頁。

4）大江素天『写真太平記』朝日新聞社、1939年、１頁。

5）成澤玲川『音と影　ラヂオとカメラの随筆集』三省堂、1940年、1-2頁。

6）『アサヒグラフ臨時増刊　写真百年祭記念号』東京朝日新聞社、1925年、記事の部、10-12頁参照。

7）同上、記事の部、12頁。

8）米谷紅浪「写壇今昔物語（二〇）」、『写真月報』1938年４月号、69頁。

9）『アサヒグラフ臨時増刊　写真百年祭記念号』東京朝日新聞社、1925年、記事の部、1-9頁参照。

10）同上、記事の部、２頁。

11）同上。

12）同上。

13）同上、2-3頁。

14）同上、３頁。

15）近年の写真史研究については、ジェフリー・バッチェン『写真のアルケオロジー』青弓社、2010年、44-95頁を参照のこと。
16）米谷紅浪「写壇今昔物語（二〇）」、『写真月報』1938年4月号、70頁。
17）越智修、福田静男編『全関西写壇五十年史――全日本写真連盟関西本部のあゆみ』全日本写真連盟関西本部、1976年、135頁。
18）同上、138-139頁。
19）成澤玲川『音と影　ラヂオとカメラの随筆集』三省堂、1940年、2-3頁。